

多元社会ケベックと国民文学論の陥穽

——ラリュ論争から見えてくるもの——

真 田 桂 子

I はじめに

今日、世界的なグローバル化の進捗は、それに伴い夥しい人の移動を引き起こしている。そして、このような移民や難民の流入による多様な人々との共存は、社会に大きな地殻変動をもたらしている。多様化する構成員と彼らがもたらす文化的側面は、それぞれの社会の文化的アイデンティティを大きく変容させている。変容していく文化的アイデンティティ、さらにはその社会のナショナル・アイデンティティをどうとらえ直し、そこにどのような新しい融和と均衡をうち立てていくかは、今日、世界の様々な地域が直面している問題である。

また、こうした「国民」概念、ナショナル・アイデンティティへの揺らぎとともに、それに対応する国民文学への問いも浮上する。果たして今日、国民文学は存在しうるだろうか？もし、存在するとするならば、それはどのようなものでありうるだろうか？

1996年、ケベックにおいて起こった、作家モニック・ラリュの『測量士と航海者』と題された講演をめぐる論争は、このような問題を鮮やかに切り取って象徴的に問いかけていると言えるだろう。ケベックにおける移民作家の台頭と、それに伴い変貌するケベック文学について問いかけたこの講演は、期せずして、ケベックにおける少数派である英語系ユダヤ人の側から、人種差別的な内容だとの苛烈なまでの反発を被り、一連の経緯において大きな反響と波紋を呼んだ。この論争は、ケベックという特殊な社会を背景にしながら、先に述べたきわめて普

遍的な問題提起をも同時に含んでいると思われる。従ってこの小論では、ラリュ論争を追いながら、そこから明らかになってくる諸問題について、批判的に検討を加えつつ考察を行うことにする。

II ケベック ——ナショナリズムと多民族化のはざままで——

この論争に分け入るまえに、まず、論争が起こる背景となったケベック社会について、簡単に概説しておく必要があるだろう。

今日のケベックを語るうえで、おそらく「ナショナリズムと多民族化」は、コインの表裏をなすような、この社会の特徴を最も雄弁に言い表すキーワードであるといえるだろう。

カナダにおける唯一のフランス語圏であるケベックの道のりは、歴史的な経緯において、決して平坦なものではなかった。16世紀半ば、フランスは最初にカナダを発見し、ヌーベル・フランスとして入植を開始したにもかかわらず、その後のイギリスとの植民地抗争に敗れ、18世紀半ばケベックは英領となる。こうしてケベックにおけるフランス系住民は、英系の支配による植民地的状況のもとに苦難の途を辿ることになる。さらにケベック社会内部においても、カトリック教会の支配によって、住民たちは二重の疎外に苦しめられることになる。すなわち、行政権力を掌握し教育へと介入した教会の聖職者たちは、住民たちに偽りの平和と安らぎを称揚するメシア思想を説き、現実をありのままに直視することから遠ざけようとしたのである。

こうした歴史的な抑圧のもと、閉鎖的な農村社会に停滞していたケベックを、いっきに民主化、近代化へと向かわせることになったのは、1960年代の「静かな革命」と呼ばれる一連の社会改革運動であった。こうして、それまでケベックにおいて、あくまで残存を目的としていた閉鎖的なナショナリズムは、独自の文化的な開花をめざす積極的なナショナリズムへと変貌を遂げるのである。仏系経済エリートの進出によって、ケベック社会はますます自信を深め、自立的な社会として、その尊厳と特別な地位の承認を求めて、カナダ連邦政府と軋轢をくり返すことになる。根強い分離・独立運動とそれに伴うレフェランダムは、フランス系のアイデンティティを顕揚しようとするケベック・ナショナリズムの何よりの表れであった。

その一方で、カナダ政府の移民法の改正によって、ケベック社会においても、ハイチ系、アジア系、北アフリカ系などの有色系移民（ビジブル・マイノリティー）が急増し、著しい多民族化が伸展していく。ケベックは、1977年に発布した101号法案（いわゆる仏語憲章）によって、フランス語化政策（フランシザシオン）を押し進め、移民の子弟の教育は原則としてフランス語で行われなければならないと規定した¹⁾。

Ⅲ ケベック文学の成立 ——覚醒から解放へ——

このような社会の動きとともに、文学においても二つの潮流がせめぎ合ってきた。すなわち、一つは、抑圧からの解放と仏系としてのアイデンティティの確立をめざすケベック文学の動きである。

ケベック文学がはじめて独自の相貌をもつに至ったといわれるのは、1950年代以降の、エミール・ネリガン、サン・ドウニ・ガルノー、アンヌ・エペールらをはじめとする、いわゆる「不在の文学」と呼ばれる一連の詩人たちの作品によってである。彼らは、20世紀中葉までの

「郷土礼賛文学」の殻をうち破り、偽りの平和と安らかさを装った田園生活のうちに隠蔽されたその空疎な現実を、ありのままに直視し、告発しようとした²⁾。さらに、60年代の「静かな革命」と70年代はじめのケベック・ナショナリズムの高まりに相前後して、国民的な詩人と仰がれるガストン・ミロンやジャック・ブローラを中心に、フランス系としてのケベックワ（ケベック人）の抑圧からの解放とアイデンティティの確立をテーマに、数多くの作品が生み出されていく。こうしたケベック文学に表れたナショナリズムの高揚や抑圧からの解放は、シュールレアリズムとの連動や、エドワール・グリッサンらによって広められたネグリチュード運動への呼応によって強められた。また、小説家のミシェル・トランブレーは、いわゆるケベック方言である *joual* を多用することによって、ケベック文学の独自性を打ち出そうと試みた。

すなわち、このようなケベック文学の流れのうちに見いだされるのは、歴史的な経緯において、イギリス系の支配による植民地的抑圧とカトリック教会の支配による内的疎外とに苦しめられてきたケベックが、確固とした言語的、文化的抛り所に根ざしながら、北米大陸におけるフランス系というアイデンティティをしっかりと確立していこうとする、ナショナリスティックな動きによるものであったと思われる。

Ⅳ 移民作家の台頭と文化的アイデンティティの模索

一方、80年代以降、先に述べたような多民族化の伸展に伴い、様々な出自の「移民作家」たちが、ケベックにおいてフランス語で活発に創作活動を展開するようになる。代表的な作家としては、エミール・オリヴィエ（ハイチ系）、レジヌ・ロバン（ユダヤ系）、イン・チャン（中国系）、マルコ・ミコーネ（イタリア系）、セルジオ・コキス（ブラジル系）…などを挙げることが出来るだろう。

こうした作家たちに共通するのは、記憶、言

語、根こぎ感、孤独、流浪…などをテーマに、それぞれの祖国と移民先であるケベックとの間を揺れ動き、そのどちらにも属さない新しいアイデンティティを作品のなかに切り拓いていこうとする姿勢である。さらに注目すべきことは、こうした移民作家たちの活動が、ケベック社会における文化的アイデンティティの変容に大きな影響を及ぼしていることである。彼ら、ネオ・ケベックワたちの作品は、移民文学というよりも、あらゆる意味において、既成の枠を取り払う「移動文学」とでも呼ぶべき新しいエクリチュールの領域を切り拓き、彼らの試みは、「多文化」から「間文化」をへて、「横断文化（トランス・カルチャー）」とよばれるもの にいたる新しい文化概念の創出に貢献しているのである³⁾。

V 『測量士と航海者』 ラリュ論争

このようなケベック文学における多民族化、すなわち移民作家の活躍を背景に、この多民族化と「国民文学」⁴⁾の関係をきわめて象徴的に問いかけるような論争が、1996年、作家のモニック・ラリュがモントリオール大学で行った『測量士と航海者』と題された講演と、その内容が収録された小冊子の出版をきっかけに起こるのである。

その講演の冒頭で、ラリュは、ある友人の作家が述べたという仮定のもとに、移民作家をめぐる次のような見解を明らかにする。

ある日、友人の一人である作家が言ったのであるが、「我々の文学界は、移民作家によって侵略されつつある。文学賞を与える審査員たちによって、依怙最屢されているとは言わないまでも、移民作家だからといって過大評価されすぎている…考えてもみたまえ、ごく最近やってきた移民作家の作品は、我々がいわゆるケベック文学と呼んでいるものとは何の係わりもないところで書かれている。ケベック文学が負ってきた歴史、アイデンティテ

ィの追求の論理やその発展とは何の関係もないところで書かれている。…内容も形式も、我々の文学が育んできたその枠組みとは何の関係もない作品を書いている作家たちが、外国で、ケベック文学の名の下に紹介されるのは非常識きわまりないことではないか。…」⁵⁾

我々の文学賞は、(彼らに)盗まれている、それらの文学賞は、ケベック文学の文脈において与えられてこそ意味があるというのに…⁶⁾

そして、この意見をめぐって、モントリオールのユダヤ系機関誌 *Tribune juif* の編集長であるガーラ・スローカーが、苛烈なまでの嫌悪感を露わにした反論をその雑誌に掲載する。〈*De LaRue à la poubelle*〉(日本語に訳せば、さしずめ「通りからゴミ箱へ」と題されたコラムにおいて、スローカーは次のように述べる。

レフェランダムの際の、あの有名なジャック・パリゾーの身も凍るような言葉「我々は金と移民票のせいで負けた」の次に、今度はインテリぶった三文文士の憎悪に満ちた口から、ラシストそのものといえるような発言が飛び出した。…モニック・ラリュによれば、ケベックにおいては、いわゆる純ケベック作家以外の作品は焼き捨てられるべきだと言うのである。…この小冊子には憎悪と嫉妬と恨みが焼き付けられている。…もし著者の名前をみなかったら、これを書いた人物はあのル・ペンに違いないと思ったであろう。…⁷⁾

スローカーのこの発言を皮切りに、ケベックの作家、批評家、ジャーナリスト、文化人などを巻き込んで、新聞紙上や雑誌において、ラリュを擁護する側と指弾する側とに分かれた一大論争が巻き起こる。

ラリュを擁護する側の論陣は、小冊子をさらに読み進めば、冒頭のある作家の意見とは問題提起にすぎず、ケベックにおける移民作家をめぐるラリュの真意はそれとはまったく別の、む

しろ正反対のものであると主張する。

実際、ラリュは、友人の作家の意見を聞きながら、「私はひどく居心地が悪く、彼にどう答えていいかわからなかった」⁸⁾としながら、移民作家とケベック文学との関係、さらには国民文学そのものについて、次のように考察を繰り返していき。

「確かに、私たちはかつて、ケベック文学に、アイデンティティを支える礎となる役目を期待したかも知れない。しかし、社会とともに、ケベック文学も今や岐路にさしかかっている。そのラベル、名称、これまでであったとされたアイデンティティは変容し、溶解しかかっているのでは…」とつぶやいた⁹⁾。

また、

民族、文化のみを拠り所に作家を分類することが出来るだろうか？…民族のカテゴリーと同じ数だけ文学があるというのだろうか？…言語こそ、あらゆる作家にとって唯一のよりどころとなるものではないであろうか？¹⁰⁾

と述べて、ラリュは、文学を民族や文化と結びつけて語ることにはっきりと異議をとなえるのである。さらに、「国家の意味が大きく変化して、これまでと同様の現実を表さなくなった今、国民文学とはいったいどのようなものでありうるだろうか」¹¹⁾と問いかける。そして、

これまでも、偉大な作家たち、あるいは優れた読者たちは、国境の境界を、時間的空間的な制約をやすやすと超えてきた。…おそらく今や、文学とは、世界的で、国際化された、地球規模で考えられるべきものなのだ¹²⁾。

と文学のもつ普遍的な意味についても言及する。そしてその上で、ケベックにおける政治と文化が結びついた曖昧な状況についてふれながら、ケベックにおいては、文化的アイデンティ

ティの問題と文学とが極めて密接に結びついていることを指摘する。従って、移民作家の問題は、このアイデンティティという概念をどう捉えるかということに係っているのである。そのために、ラリュは、「測量士」と「航海者」という二つの比喩をもちだしながら説明を試みる。

…測量士と航海者は、アイデンティティを考える上での二つの相補的な側面である。アイデンティティとは簡単に捉えられるものではなく、均質なものでもない。それは意識の総体であり、時間と共に変容していくのである。…¹³⁾

そして、アイデンティティはこの両者によって、分かち難く作られていくことを踏まえながら、再び移民作家とケベック文学について次のように述べる。

…その作家は文学に属しているという意味で、我々の文学に属しているのである。…ケベック文学をではなく、単なる文学そのものを想定すべきなのである¹⁴⁾。

このように、ラリュの見解は、決して冒頭に引用された作家の意見に収斂されるものでないことは明白であるのだが、ラリュを激しく非難した一派は、たとえ、それが友人の口を通してという仮定であったとしても、ケベックにくすぶっているラシスト的な見解を露わにしたと反発するのである。スローカーは、ラリュが友人の口を借りてそうした意見を述べたことは、ル・ペンより悪質だと指弾する。さらに、ミシュリーヌ・ド・セーヴは、次のような留保的な態度や意見を引き合いに出しながら、ラリュのなかにあるとする「ラシスト的」な姿勢を非難する。

もしその友人との会話に私が拘りつづけたとしたら、それは、その作家が言ったことが

ある意味で正しい、ということを否定しきれないと思ったからである¹⁵⁾。

我々の文学はこれまで、比較的均質で共通な世界を表すものでありえた。そして、ケベック的な作家とはどのような存在かと問うてみる必要もなかった。…¹⁶⁾

ラリュを批判する側の論陣は、この前提とされた今日までのケベック文学の自明性に激しく異議を唱えるときともに、たとえ議論の発端であったとしても、「文学」をナショナリズムや民族性の問題と結びつけたことや、議論を通して現れる「我々」と「彼ら」の分断の言説（ディスコース）に対してのつけから反発するのである。

ナショナリスト的なイデオロギーは、文学において愚の骨頂でしかないことは言うまでもないが、文学をナショナル・アイデンティティの道具に用いることもばかげたことだと言わざるを得ない。…¹⁷⁾

土着の作家である「我々」に対して、「他者が形作る文学」の「異質性」や「不均質」を対置させることによって、彼女（ラリュ）は自分自身で罨にはまってしまっている。テキストを通して現れる「我々」と「彼ら」の用法は、彼女をむしばんでいる¹⁸⁾。

このように、『測量士と航海者』のテキストは、様々な反応を引き起こし大きな論争へと発展していくことになる。

Ⅵ ラリュ論争から見えてくるもの

このようなラリュ論争の一連の経緯を通して、少なくとも、次のような問題点が明らかになってきたと思われる。

その第一は、論争の前提となった「フランス系・純・ケベック文学」への疑義である。ケベックにおいて、純然たる国民文学なるものが果

たして本当に存在していたと言えるのが、この論争において、はからずしも抜本的に問い直されることになる。そしてその過程において、ケベック社会の多元性が暴かれることになる。

さらに注目すべきことは、この論争を通して、政治と文化の接合にともなう困難と矛盾が、はっきりと露呈したという点である。すなわち、この論争の発端は、「移民作家」への補助金をめぐる不公平感が問題になっていた。「移民」であるという文化的な背景が、「助成金」という政治的な配慮に、実際にどれだけの影響を及ぼしたかは測り知れないが、政治と文化の二つの側面が結びつけて論じられていることは明らかである。またこうした状況は、移民出身の作家たちを「移民作家」としてケベック社会に制度的に取り込むことの矛盾やジレンマをも浮き彫りにしているのではないであろうか。

いずれにせよ、ここから多民族、多元社会ケベックにおける問題の深さが照らしだされると言えよう。

一方、ケベック文学という「国民文学」を問うことを通して、文学そのものの意味も深く問い直されている。文学を民族性に結びつけて論じることは、可能であろうか？果たして、「国民文学」と呼ぶうるものは存在するのか？今日、文学とアイデンティティの関係はどのように表現されるのであろうか？

ラリュ論争は、ケベックのような多元社会において国民文学論を語ることの困難と陥穽を浮き彫りにしたが、しかし、「測量士」と「航海者」という、二つの文化的アイデンティティ概念のせめぎ合いを象徴的に言い表すことによって、この社会のもつ未来と可能性をも同時に示唆していると言えるのではないであろうか。例えば、*Je me souviens* のナンバー・プレートをつけたケベック車を運転する移民について語られた次の指摘は、そのことを雄弁に物語っていると思われる。

ケベック州を車で移動してみて初めて気がつ

いたのだが、カナダでもここだけナンバープレートが変わっている。どのプレートにも、ナンバーの上に標語のようなものが書かれているのだ。…〈Je me souviens〉…聞いてみると、ケベックの人々が、いかにフランス語を守ってきたかを〈憶えている〉という意味らしい。それを教えてくれたのは、セントローレンス河の僻地で民宿をしている若い男だった。…男はアルジェリア移民だった。確かに同じフランス語圏として、アルジェリア出身は少なくない。……その彼の車のナンバープレートも〈Je me souviens〉だったのである。

すると彼は何を〈憶えている〉のだろうか。それぞれの移民が、それぞれの言語を回想していることになる。アルジェリア人はアルジェリアの、イラン人はイランの、台湾人は台湾の現在と過去を、移動と分離を、適応と変化の歴史を、ハンドルを握りしめながら回想しているのである。言語と回想と移動がこれほどまでに素直に結合している光景は、文明の希望ではないだろうか¹⁹⁾。

すなわちここには、「測量士」的な、根をはる文化的アイデンティティ概念と、「航海者」的な、移動する文化的アイデンティティ概念とが融合し、拡散してゆく様が、きわめて象徴的に喚起されているのである。

このように、多元社会ケベックはまたグローバル化が進捗するなか、多くの社会が直面するであろう問題を先取りしながら、同時にそれを乗り越えるための可能性をも示唆していると言えるのではないであろうか。

注

- 1) このケベックの歴史的な経緯については、拙稿『比較文化キーワード』項目「ケベック」、竹内実、西川長夫編、サイマル出版会、1991年、を参照されたい。
- 2) この作家たちがしばしば作品に取り上げたのは、疎外と剥奪を象徴する、骨、死、閉塞状況などの

モチーフであった。

- 3) 最新の研究成果として、移民作家がどのような影響をケベック文学に与えてきたかについて、Moisan, Clément et Hilderband, Renate, *Ces étrangers du dedans*, NotaBene, Québec, 2001, 365p. において詳しい分析がなされている。とりわけ、文化的アイデンティティの問題を考える上で、ケベックの移民作家によって生み出されている「移動文学」や「横断文化」は注目すべき状況で、筆者も稿を改め分析を行う予定である。
- 4) ケベックはいわゆる「国家」ではないが、この場合「国民文学」の呼称を用いることは妥当であると思われる。nation の訳は常に曖昧さを伴っており、日本語で「国民」と訳すか「民族」と訳すかは、場合によって決まる。la littérature nationale の日本語訳として定着している「国民文学」は、単に国民国家の文学という意味だけでなく、民族的な結束と自覚を促す文学を表すとも考えられ、ケベック文学の場合にもあてはまると思われる。例えば、「国民国家のなかで生産—消費される文学が本質的に国民文学であるということと、いわゆる国民文学の概念とは明らかに密接に結びついてはいるが、はっきりと区別して考える必要があるだろう。国民文学の必要が叫ばれ、国民文学論が熱心に行なわれるのは、主として、強力な国民統合を必要とする後発諸国が、民族的な自覚が必要とされる危機の時代においてである。」(西川辰夫〈国民文学の脱構築〉『国民国家論の射程』柏書房、1998、61ページ)
- 5) LaRue, Monique, *L'arpenteur et le navigateur*, Fides, Montréal, 1996. p.8
- 6) *Ibid.*, p.9.
- 7) *Tribune juif*, mars 1997, Vol 14. Numero 3.
- 8) *Op. cit.*, p.9.
- 9) *Ibid.*, p.10.
- 10) *Ibid.*, pp.10-12.
- 11) *Ibid.*, p.16.
- 12) *Ibid.*, pp.16-17.
- 13) *Ibid.*, p.23.
- 14) *Ibid.*, p.28.
- 15) *Ibid.*, p.10.

- 16) *Ibid.*, p.11.
- 17) *Tribune juif*, juin 1997, Vol.14 Numero 5 “Litterature et nationalisme” Marc Angenot
- 18) *Ibid.*, “Malaise au pluriel: L’Arpenteur et le Navigateur”, Micheline De Sève
- 19) 港千尋『記憶—「想像」と「想起」の力』講談社選書メチエ, 1996年, 251ページ。

〔付 記〕

この論考は, 2002年度カナダ政府出版助成プログラム, 2002年度阪南大学産業経済研究所助成研究の成果報告の一部である。記して感謝の意を表したい。

(2003年1月10日受付)